

白山の自然誌 23

白山の爬虫類



2003年3月

石川県白山自然保護センター

はじめに

ヘビを見るのはもってのほか、ヘビと聞くだけでも毛嫌いする人が結構います。何も悪いことをしていないのに悪者あつかいされるのもヘビです。ごく一部で、家の主、守り神として尊ばれることもあります。ほとんどの場合嫌われ者となっているようです。足のないくねくね動く体、なかには体の色や斑紋を毒々しいと感じ嫌がる人もいることでしょう。

逆にペットとしてヘビやトカゲ、カメなどを飼う人が最近増えているようです。これらのなかには飼いやすいものもいます。鳴くことはなく静かで、くさい臭いも出さず、場所をとらず、少しくらい家を留守にしても平気なことなどから好まれるようです。

嫌いな人のなかには、その正体不明なところが原因であることも多いことでしょう。何も知られずに、あるいは間違った形で受け取られ嫌われているなら、彼らには何と不幸なことでしょう。

ヘビやトカゲ、カメなどは、^{はちゅうるい}爬虫類といわれるグループにまとめられます。あまり知られていないその生態や、最近明らかとなった白山地域での生息状況についてお話しします。

表紙：ヤマカガシ成体
裏表紙：ヤマカガシ幼体

も く じ

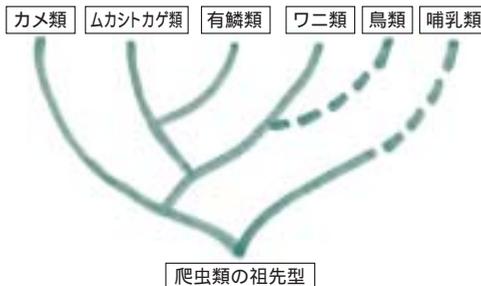
爬虫類とはどのような動物か.....	2
トカゲやヘビの眼や鼻の感覚はよいのか.....	3
トカゲやヘビは何を食べているのか.....	4
白山地域にいる爬虫類.....	5
環境別にどのような爬虫類がいるのか.....	6
白山地域の爬虫類の垂直分布.....	8
ニホンイシガメ.....	8
ニホンヤモリ.....	9
ニホントカゲ.....	10
ニホンカナヘビ.....	11
タカチホヘビ.....	12
シマヘビ.....	13
ジムグリ.....	14
アオダイショウ.....	15
シロマダラ.....	16
ヒバカリ.....	17
ヤマカガシ.....	18
ニホンマムシ.....	19
爬虫類と人間生活.....	20
おわりに.....	21

爬虫類とはどのような動物か

動物を分類する上で、陸上の脊椎動物に両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類があることはよく知られています。この中で爬虫類の特徴とされるものをあげると、変温動物、卵生、胚の発生の途中に羊膜を生じる、窒素化合物を尿酸に変えて排出する、心臓は2心房2心室、肺呼吸、皮膚に表皮性の鱗がある、などがあります。しかしこれらは、爬虫類に限った特徴ではないのです。

例えば、哺乳類にも体温が下がり冬眠するものがあります。卵で生まれるのは鳥類と同じで、哺乳類にも卵生のもがあります。また爬虫類にも卵生でなく胎生のもがあります。羊膜を生じるのは鳥類、哺乳類と同じです。心臓はワニ類では完全な2心室、その他の不完全なものを2心房1心室と考えると両生類と同じです。肺呼吸は鳥類、哺乳類と同じ、皮膚の鱗は鳥類の脚や哺乳類の一部にもみられます。鳥類や哺乳類の毛や羽毛なども爬虫類の鱗と発生的に同じで、違っているとは言いきれません。このように厳密に爬虫類を定義することは難しく、鳥類や哺乳類との違いがはっきりしているわけではありません。

爬虫類にはカメ類、ワニ類、有鱗類（トカゲ類、ヘビ類）、そしてムカシトカゲ類があります。そして系統関係をみた場合、一例として図のような関係があるとされています。つまり爬虫類はかなり多様な動物のグループなのです。また現在生きている哺乳類が約4,000種であるのに対して、トカゲ類が約4,500種、ヘビ類が約3,000種と多いことを考えると、爬虫類が陸上脊椎動物の中でも非常に繁栄していることがわかります。そして、大昔に繁栄した恐竜や翼竜などのことも忘れることはできません。



爬虫類の各グループと鳥類、哺乳類との関係を示した系統樹(足田 2002より)

トカゲやヘビの眼や鼻の感覚はよいのか

トカゲ類の中でも、主に夜行性で樹上で生活するヤモリの仲間は視覚がすぐれており、地上で生活するトカゲの仲間は視覚は劣りますが、嗅覚がすぐれています。またヘビ類は一般に視覚も嗅覚もすぐれています。

昼に活動するヘビは一般に瞳は丸く、眼は中程度の大きさであるのに対し、夜に活動するヘビは大きな眼で、多くは縦長の楕円形をした瞳をもっています。丸い瞳は、日中の光の強いときには、細く絞って光の入ってくるのをおさえることができます。また大きな眼は暗いところでもより多くの光を集めることができます。縦長の瞳も、より多くの光が入るように大きく開くことができ、光の少ない夜の生活に向いています。

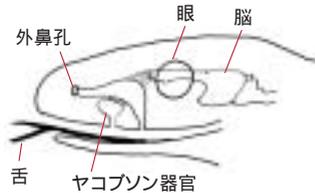
ヘビの中には、眼で見える可視波長域以外に、赤外線（か し は ち ょ う き）の波長域を感じる事ができるものがあります。ピット器官と呼ばれる凹み（へこ）が鼻と眼の間にあり、ここで微妙な温度を感じることができ、夜に哺乳類や鳥類などの恒温動物から発せられる温度を感じ取って捕まえることができます。わが国ではニホンマムシやハブがピット器官を持っています。

ヘビやトカゲがよく舌をべろべろ出しているのがみられますが、これは匂いを嗅いでいるのです。ヘビやトカゲは鼻から匂いを感じ取るだけでなく、舌を出してその先に空気中の匂い物質を付けて、舌を口の中に入れるとその匂い物質は、口の天井にある一対の穴の辺りに運ばれます。この穴がヤコブソン器官と呼ばれる匂いを感じる器官に通じています。ヘビやトカゲは、鼻よりヤコブソン器官のほうが主要な嗅覚器官となっています。

聴覚については、外耳のないヘビにも内耳はあり、音を感じることができます。とくに地震の震動のような周波数の低い音に対して最もよく感じ取ることができるようです。



ピット器官で赤外線を感じ取る



ヤコブソン器官で匂いを感じ取る

トカゲやヘビは何を食べているのか

トカゲ類は虫を食べる食虫性の動物として発展してきました。虫といっても昆虫に限らずクモ類やムカデ、ミミズなどの小さな無脊椎動物も含まれます。鳥やコウモリの多くも食虫性ですが、彼らが主に空中を活動域にするのに対して、トカゲ類は地上から樹上などを活動域としています。夜行性で樹上性のヤモリ類と、昼行性で樹上性のイグアナ類、昼行性で地上性のトカゲ類など、活動時間と生活場所をすみ分けています。

ヘビ類は餌を丸のみにするため、外形も内蔵も他の爬虫類とは大きく異なり、長い体となっています。この体で、地上をはい回ったり、地中にもぐったり、木に登ったり、泳いだりできます。餌を探す方法には大きく分けて探索型と待ち伏せ型があります。餌を求めて動き回るのが探索型（シマヘビなど）、場所を決めてじっと餌が来るのを待つのが待ち伏せ型（ニホンマムシなど）です。何を餌としてねらうかによって両方を使い分けているヘビもいます。餌をくわえてのみこむだけのヘビもいますが、餌の動物に体を巻きつけ絞め殺してしまったり（シマヘビ、アオダイショウなど）、毒を使って餌を弱らせたり殺したり（ニホンマムシなど）する行動をとるものもいます。

カエル食：ヤマカガシが代表的なカエル食で、皮膚から毒を出すヒキガエルも食べます。ヒバカリも主にカエルやオタマジャクシを食べます。

カタツムリ食：沖縄県石垣島、西表島に生息するイワサキセダカヘビは頭とあごが特殊な形をしており、そのあごを使ってカタツムリを殻からを取り出して食べます。

ミミズ食：タカチホヘビやリュウキュウアオヘビはほとんどミミズ類を餌としています。

爬虫類食：シロマダラはトカゲ類や小型のヘビ類などを主に食べます。

小型哺乳類食：ジムグリがヒミズなど食虫類やハタネズミなど小型ネズミ類を主な餌としています。

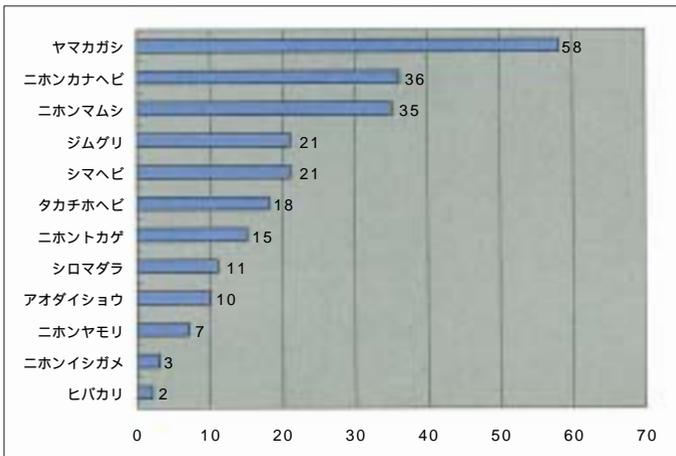
鳥・哺乳類食：アオダイショウが哺乳類や鳥類、鳥類の卵などを主に食べます。

何でも食べるヘビ：シマヘビは哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類など何でも食べるヘビです。ニホンマムシやハブもこれらの動物の他に魚類も食べます。

白山地域にいる爬虫類

白山地域で広く調査をしたところ、集まった爬虫類の記録は237あり、今までに表のように2目6科12種の生息が明らかとなっています。この中で最も多く見つかったのはヤマカガシで58匹、全体の24.5%です。次いでニホンカナヘビ36匹(15.2%)、ニホンマムシ35匹(14.8%)が多く、この3種で全体の54.4%となり半数を超えます。以下図のとおりのおりとなりました。

カメ目	イシガメ科	ニホンイシガメ
有鱗目	ヤモリ科	ニホンヤモリ
〃	トカゲ科	ニホントカゲ
〃	カナヘビ科	ニホンカナヘビ
〃	ナミヘビ科	タカチホヘビ
〃	〃	シマヘビ
〃	〃	ジムグリ
〃	〃	アオダイショウ
〃	〃	シロマダラ
〃	〃	ヒバカリ
〃	〃	ヤマカガシ
〃	クサリヘビ科	ニホンマムシ



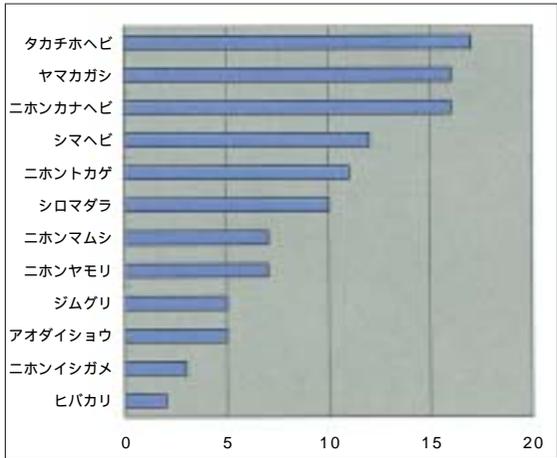
白山地域で記録された爬虫類の個体数

環境別にどのような爬虫類がいるのか

爬虫類相を環境別にみていくに際し、白山の環境を大きく次の4つに分けました。まず最も低いところは、山麓の集落周辺から車道があったり植林地や二次林など比較的人の手が加わっている標高1,000m未満の範囲で、ここを山麓部とします。次に、良好なブナ林の広がる標高1,000mから標高1,600~1,700m付近（この範囲でもオオシラビソやダケカンバが優占しておれば、記録は次の亜高山帯に入れた）がブナ帯です。そこから2,300m未満までのオオシラビソ林やダケカンバ林を中心とするところが亜高山帯。それより上で標高2,702mの御前峰^{ごぜんがみね}までのハイマツ林や高山草原、岩礫地や砂礫地のあるところが高山帯です。

山麓部

全体の46.8%にあたる111匹の記録はこの範囲にあり、タカチホヘビ17匹が最も多く、ヤマカガシとニホンカナヘビがともに16匹とこれに次いで多く記録されています。以下シマヘビ、ニホントカゲ、シロマダラが続き、全体で12種記録されました。タカチホヘビ、シロマダラなど一部の種が選択的に収集され、アオダイショウなど一般的なヘビがいても記録として残されていないため、これが山麓部の一般的な爬虫類相の特徴を表しているとはいえませんが、今回記録されたすべての種が見つかっていることと特定の種に偏りがいないことが特徴といえるかもしれません。

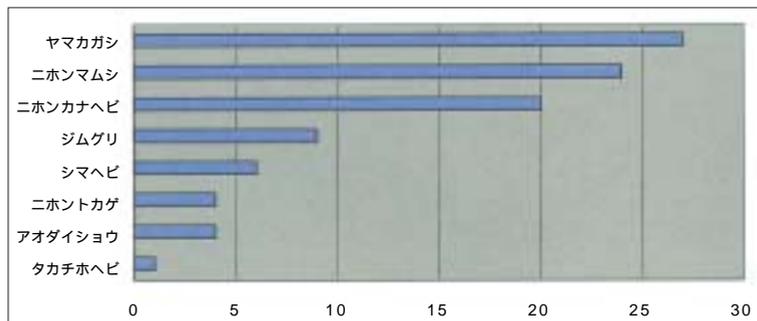


白山山麓部の爬虫類記録数

ブナ帯

全体の40.1%にあたる95匹の記録がありました。ヤマカガシが最も多く

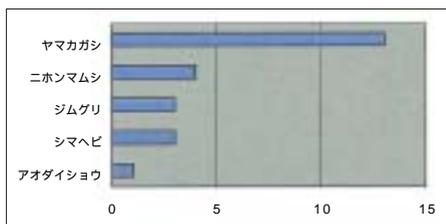
27匹（28.4%）、次いでニホンマムシ24匹（25.3%）、ニホンカナヘビ20匹（21.1%）と続き、この3種で74.7%となり大部分を占めています。この3種がブナ林の代表的な爬虫類といえます。他にジムグリ、シマヘビ、ニホントカゲ、アオダイショウ、タカチホヘビの計8種が記録されました。



白山ブナ帯の爬虫類記録数

亜高山帯

5種24匹の記録があり、ヤマカガシが13匹（54.2%）で最も多く見つかりました。以下ニホンマムシ4匹、ジムグリ3匹、シマヘビ3匹、アオダイショウ1匹です。ヤマカガシが特に多いのが特徴といえます。



白山亜高山帯の爬虫類記録数

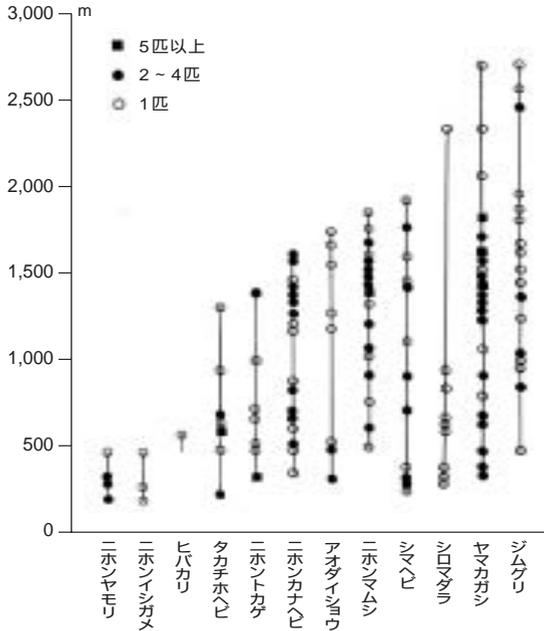
高山帯

3種7匹の記録があり、ジムグリ4匹、ヤマカガシ2匹、シロマダラ1匹です。ジムグリが多いのが特徴といえます。特にジムグリおよびヤマカガシは、白山山頂の御前峰2,702m三角点付近の岩礫地に記録があり、白山で最も標高の高い場所での記録です。

環境別では、標高が高くなるに従い種数と個体数が少なくなっていることがわかります。

白山地域の爬虫類の垂直分布

白山地域で記録された爬虫類12種について、垂直分布を示すと図のようになりました。ヤマカガシが最も広い範囲で記録され、次にジムグリが広い範囲にみつかりました。逆にニホンヤモリやニホンイシガメは低地にしか記録はありません。



白山地域の爬虫類の垂直分布

ニホンイシガメ

背中の中羅の後半部にある、のこぎり状の切れ込みが特徴のカメで、池や沼、川にすんでいます。

白山地域からは3例の記録がありましたが、いずれも少し以前の記録で、最近いるという情報は得られていません。石川県内では、低山地につくられた農業用貯水池や河川の中流より上での発見例が多いとされています。白峰村では昔からいるという話はありませんので、少し以前の記録ですが、吉野谷村中宮の溜め池の標高460mが、最も標高の高い生息地です。

ニホンヤモリ

漢字では家^{やもり}守、屋^{やもり}守、守^{やもり}宮などと書きます。文字どおり人家や建造物にすんでいて、夜、明かりに集まる虫を食べによく出てきます。指の裏に並ぶ鱗の表面にたくさん生えた、かぎ状の細い毛で、壁や窓ガラス、天井までも引っかけて歩くことができます。尾は外敵に襲われたりすると切れやすく、切れてもまた生えてきます。体色は周りの環境によって濃淡に変化します。

全国的には、関東、北陸以西の内陸部を除く地域と、東北地方の一部に部分的に生息しており、その分布から人間や物の移動にともなって生息地を広げたと考えられています。石川県内では、能登、加賀ともに低地の建築物に広く生息しています。また人家の比較的多い大きな谷に沿ってかなり深く分布を広げ、白山麓では最も上流の白峰村を除いて全ての町村で見つかっています。吉野谷村中宮の標高460mが最も高い場所での記録となっています。



垂直の壁にはりつく



指の裏にかぎ状の毛を持ち、
これで引っかけて壁を上下する



排出物の尿酸(白色)と糞

ニホントカゲ

ニホントカゲは日本で最も普通に見られるトカゲで、子供(幼体)の時は尾が青く、黒っぽい体に金色の縦すじが5本あります。成長するに従い青色と縦すじ模様は薄れていき、全体が褐色になりますが、メスは成熟しても子供の色や模様を残すものが多いといわれています。メス親は卵を産んだあと、^ふか化するまで卵を守ることが知られています。

トカゲなどが石の上などで日光浴をしていることがよくありますが、これは体温を上げるためです。しかし、変温動物といっても体温が外気温のままに変化するのではなく、活動しているときの体温は30～35℃に保たれていることがわかっています。尾は外敵に襲われたときなどに自分で切り落とし、外敵がよく動く切れた尾に気を取られている間に逃げてしまいます。

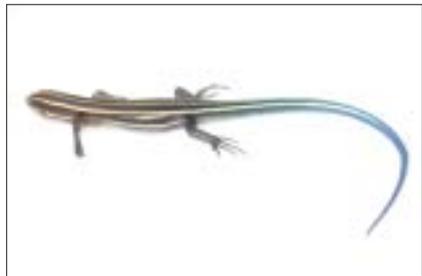
白山地域では、山麓部からブナ帯の標高1,390mまで分布しています。山麓部では普通にみられ、時には狭い範囲に集中して見つかることもあります。



つやのある体に金色の縦すじが特徴



成 体



幼 体

ニホンカナヘビ

ニホントカゲがつやのある滑らかな体をしているのに対しニホンカナヘビはつやのない、かさついた体をしていて、尾が非常に長い（体の約2倍）ことが特徴です。背中も側面も褐色で、腹は白または黄色です。子供（幼体）の体色は濃い褐色です。

白山地域では、全体としてヤマカガシについて数が多い爬虫類です。山麓からブナ帯上部まで広く分布していて、最も標高の高いところは1,600 mでした。川原の砂礫地、林道上、草地、人家、オニグルミ林、オオバヤナギ - ドロノキ林、クロベ - キタゴヨウ林、ブナ二次林、ブナ原生林など、様々な環境に生息しています。ブナ帯では優占種となっていて、ヤマカガシ、ニホンマムシに次いで数多く生息しています。



幼 体



成 体

タカチホヘビ

全長50cm前後までの小型のヘビでおとなしく、夜行性のため一般的にはあまり知られていませんが、決して数の少ないヘビではありません。体は真珠のような光沢がある褐色をしていて、背中の中央に細く黒い縦すじがあります。普通のヘビは体の鱗が瓦状かわらに重なっていて皮膚がみえないのに対し、鱗がタイル状に並んでいるので皮膚が一部裸出していて、乾燥に弱いヘビです。主に地中で活動し、ミミズ類を餌としています。

白山地域では狭い範囲に集中的に見つかり、標本が比較的多くあります。道路の山側の側溝や崖下の道路で死体が見つかっていて、夜間に活動していたものが溝に落ちたり、道路上で夜明けとなり日射などにより乾燥して死亡したものと考えられます。標高700m以下にほとんどが記録されていますが、950m、1,300mでの記録もあります。



背中の中央の縦すじが特徴（成体）

シマヘビ

白山ではアオダイショウと共に大型のヘビで、大きいものは2m近くになります。子供（幼体）の時と成熟してからとは体色がまったく異なり、また成体でも色にかなり変異があります。成体は淡褐色の体に4本のはっきりした縦すじがあるのが一般的ですが、縦すじのないものやアオダイショウのような草色がかかったもの、全身黒色のものなどがあります。

幼体は赤っぽい褐色で、背中に少し濃い横じまがあります。時に頭部が三角形に見え、マムシと間違えられることがあります。瞳は強い光のもとでは縦長の楕円形になり、瞳の丸いアオダイショウと区別できます。また光彩は赤っぽく、アオダイショウのように黒褐色ではありません。両生類、爬虫類を中心に、哺乳類、鳥類とさまざまな動物を餌とします。

一般の人によく知られ、石川県内の海岸沿いから低山に広く記録されていますが、白山地域では低地の人家や耕作地のみならず、ブナ帯や亜高山帯にまで生息していて、最も標高の高い記録としては1,920mで見つかっています。



幼 体



成 体

ジムグリ

名前は地面にもぐるところからきていて、小型のネズミ類やモグラ類などを主な餌としています。子供（幼体）は特に赤っぽく、黒い斑点が多くありますが、成体になると淡褐色となり体の斑点は少なくなります。腹面には黒くて幅のある斑点がたくさんあります。大きくても全長1mくらいまでのおとなしいヘビです。

白山地域では低山にも記録はありますが、むしろブナ帯以上高山帯までに多く見つかっています。特記すべきは白山山頂、御前峰三角点付近で見つかっていることや、これを含め高山帯に4例の記録があることです。他にも、白山の高いところで赤っぽいヘビを見たという話があり、ジムグリの可能性が高いです。



成体の背面



腹面の黒色の模様



幼体は赤味が強い色

アオダイショウ

シマヘビとともに名前のよく知られたヘビです。日本のヘビの中では最もよく木に登るヘビで、木の大きな穴などにすみますが、特に木造の人家にすみついて、屋根裏をすみかとしたりしています。昔から家の主として大事にされ、人と共存してきたヘビでもあります。大きなものでは2mを超える日本では最大のヘビで、体色は草色がかった褐色で、あまりはっきりしない縦すじがあります。子供（幼体）の体表は成体とはまったく違って、背や側面は小斑が並んだ、はしご状の模様となっています。そのためニホンマムシやシロマダラと間違われることがあります。主に鳥類やその卵、哺乳類を餌とします。

白山地域では山麓部で普通にみられ、少数がブナ帯から亜高山帯下部（1,740mが最高標高）でも見つかっています。

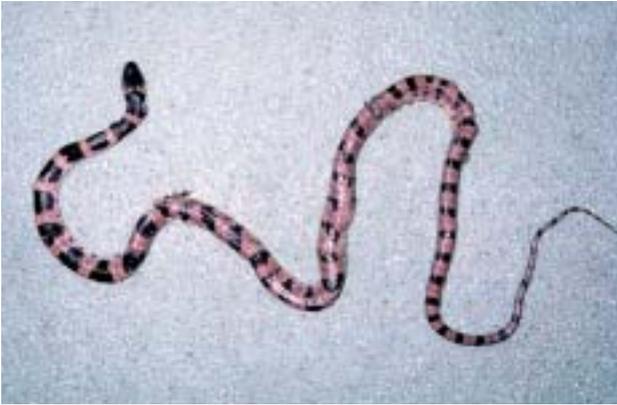


幼体の模様の残る個体

シロマダラ

名前のとおり灰色と黒褐色が交互に並んだ、まだら模様をしているヘビで、大きくても70cmくらいの細いヘビです。子供（幼体）のときは特にまだら模様のはっきりしていて、後頭部の白色がめだちます。

トカゲや小型のヘビなど爬虫類を主な餌としています。夜行性で昼間は石の下や建物のすき間などに隠れているとされていますが、白山地域では日中もよく見付き、比較的多くの記録があります。ほとんどが標高1,000m以下で見つかっています。



成 体



幼体は後頭部の白色が目立つ

ヒバカリ

全長50cm前後の細いヘビで、背は褐色の目立たない体色をしています。首の部分に斜めに走る黄色のすじが特徴的です。林の中にもすんでいてミミズなどを食べていますが、水田など水辺でよくみつきり、水の中や水辺で小型のカエルやオタマジャクシ、ドジョウなどを捕まえて餌としています。

白山地域では鶴来町の獅子吼高原への車道と、吉野谷村の白山スーパー林道で記録されているだけですが、石川県内では能登地方で広く記録があり、舩倉島での生息も知られています。今後注意して探せば、白山地域でも、もっと多く記録される可能性があります。



首の部分に斜めについた黄色のすじが特徴

ヤマカガシ

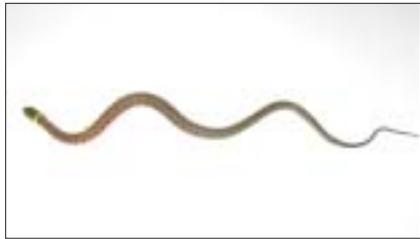
日本では最も普通にみられるヘビの一つですが、体色の変異が多く、識別には注意がいります。草色がかった褐色の地に黒褐色の斑点が連なっていたり、これに赤っぽい色が混じっていたり、また模様が全くなかったり、全体に黒っぽかったりとさまざまです。幼体は首の部分に黄色のすじが目立ちます。体表はアオダイショウのように滑らかではなく、ざらついている、大きなものでは1.5mちかくになります。カエル類が主な餌です。

このヘビには強い毒があり、注意を要します。上あご後部の大きな歯でかまれる（つまり深くかまれると耳下腺^{じかせん}（デュベルノイ腺）の毒が注入され、体質によっては出血が止まらなくなります。また首の部分の内側に有毒物質を分泌する顎腺^{けいせん}を持っていて、ここを強くつかまれたりすると乳白色の毒液を出して、目に入ると激しい炎症をおこすと言われています。

白山地域では、最も数多くの記録があり、第2位のニホンカナヘビに大きな差をあけています。低地から標高1,840mまで連続して生息していて、ブナ帯および亜高山帯の爬虫類の第1位を占めています。高山帯でも記録され、その1つは山頂御前峰の三角点付近の岩礫地で、白山で最も高い場所での記録です。



成 体



幼 体



舌を出し入れして匂いをかぐ

ニホンマムシ

よく知られた毒ヘビですが、自分から襲ってくることは普通はありません。かまれるのは、人の方の不注意によることが多いようです。山道で出合っても、じっとしていることが多く、その斑点状の模様は落ち葉にまぎれて分かりにくいことがあります。平地では春や秋の日中に日光浴に出ることがよくありますが、それ以外は主に夜に活動します。山では夏の日中もよく見つかります。

眼で物をみるだけでなく、ピット器官（P.3 参照）と呼ばれるもので赤外線、つまり熱を感じ取ることで餌動物をさがすことができます。卵でなく子供を産むことが知られていますが、哺乳類の真の胎生と違い、殻からを持った卵が、体内で孵化したあと生まれるもので卵胎生とよばれます。

白山地域では、全体としてヤマカガシ、ニホンカナヘビに次いで数が多く、特にブナ帯での記録が多く（第2位）、亜高山帯でもヤマカガシに次いで多く見つかっています。最も高い場所は標高1,850mのダケカンバ - オシラビソ林で、低地からこの標高まで連続して記録がありました。



斑点状の模様が特徴

爬虫類と人間生活

近年、カメやトカゲなどを飼う人が増えています。はじめ小さくてかわいくても大きくなると手に負えなくなり、野外へ放すことがよくあるようです。ペットショップなどで購入された北アメリカ原産のミシシippアカミミガメ（商品名ミドリガメ）が池や川に放されて増え、日本の自然を壊しています。

私たちの周りでは毒を持つヘビとしてヤマカガシとニホンマムシがいます。どちらも比較のおとなしいヘビですから、誤って踏みつけたり触ったりしなければ、むこうからおそってくることは普通ありません。自然の状態のよい白山地域にはどちらも数の多いヘビですが、その被害は聞きません。しかし、ヤマカガシの毒はかなり強いらしく、注意したいものです。

あまり知られていないことですが、ヘビ類が私たちの生活に大変役に立っていることがあります。ヘビの多くは農林業の害獣であるネズミ類などを食べてくれます。耕作地や山林の生態系の中で、ネズミ類などが増えすぎないようにバランスを保つはたらきをしているのです。ところが近年、水田の耕地整理でコンクリートの畦や用水路建設のため、あるいは手入れのされない暗い山林などのため、爬虫類にとって、すみにくい環境が増えています。また道路で車にひかれたり、コンクリートの側溝に落ちて死ぬヘビやトカゲもたくさんいます。道路を造るときに爬虫類や両生類が道を横切らなくてもよいように、トンネルをつくったり、落ちてもはい上がれるような側溝にするなどの配慮も必要です。

あるところの研究で、水田が休耕田になったり工場が建ったりと環境が変化していく中で、最も多くいたヤマカガシが減少し、代わりにシマヘビが優勢となり、ついにはヘビがすめなくなってしまう事例が示されています。食べ物の動物が減ったり、隠れ家や冬眠場所がなくなってしまうのです。

白山はブナ帯から山頂まで本来の自然がよく残っています。調査で明らかとなった各環境ごとの爬虫類の種類や数は、自然のよい状態を表していると考えられます。今後、少なくとも人の影響による爬虫類の種類や数の変化がないことを願いたいものです。

お わ り に

白山の登山道を歩きながら発見したトカゲ類やヘビ類を20年余にわたって記録し、石川県白山自然保護センター研究報告第29集に発表しました。その一部を一般向けに書き直し、また爬虫類の一般的なことを紹介したのがこの冊子です。

調査をまとめるにあたって、いろいろと文献を探しましたが、トカゲやヘビについては、低地での研究は比較的良好に行われていますが、高山帯をもつ山ではほとんど調べられていないことがわかりました。低温などの高山の気象条件が、ヘビの行動を不活発にしているのか、なかなかみつからないことが一つの原因と思われます。白山と比較する他の山の報告書がほとんどなく、あったとしても定量的に書かれていませんでした。

爬虫類は、自然の中では捕食者として重要な位置を占め、タカ類などの餌としても重要な動物です。取り付きにくい動物ではありますが、まだまだ分かっていないことも多く、興味を持ったり研究したりする人が出てくることが期待されています。この冊子が、爬虫類についての関心を引き起こすことになれば幸いです。

文献収集などで大変お世話になった徳本 洋氏、また爬虫類の生息情報をいただいた方々にお礼申し上げます。

写真：八神徳彦（ヒバカリ）、野上達也（ジムグリ幼体）、上馬康生

白山の自然誌 23	発行日 平成15年3月25日
	文・構成 上馬 康生
白山の爬虫類	発行 石川県白山自然保護センター 石川県石川郡吉野谷村木滑又4 Tel.0761-95-5321 Fax.0761-95-5323 E-mail hakusan@pref.ishikawa.jp
	印刷 (株)大和印刷社



本誌は古紙配合率100%の再生紙を使用しています。

